
夢境の国のアリス

十六夜 祈雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢境の国のアリス

【Nコード】

N3318Y

【作者名】

十六夜 祈雨

【あらすじ】

病弱で気弱な少女「アリス」。とある朝、目が覚めるとそこには一人の青年がいた、うさぎの耳を生やしていた青年が。彼は「時計うさぎ」と名乗り、アリスを「不思議の国」へと連れて行くのだ。た。

彼女は知らなかった。連れてこられた世界がどんな世界なのかを。彼女は覚えていなかった。何よりも大切な「ゲーム」の説明を。

アリスは戸惑いながらも次々と現れる「登場人物」と交流を深め、
「不思議の国」のことを知っていく。
その先にあるのは夢の終わりか、それとも現実の終わりか。

『俺達』のアリス。

夢を見ようか。君だけの夢を。君が描く、理想の世界の夢を。

そう、君が夢を見れば、そこは君だけの世界になる。その世界は『夢』であり、『現実』でもある。

だから、アリス。俺とゲームをしようか？

アリス、君が勝ったのなら、『夢』は『現実』となり、『現実』は、『夢』に飲み込まれる。俺が勝ったら……そうだな、君は俺だけのモノになってもらおうかな。

夢に囚われるアリス。それは『現実』へ戻る道を無くすということ。

君が帰りたいと望んでも、君は帰れなくなるだろう。帰りたいと望むかは、別としてね？

ゲームは簡単だよ。『夢』の世界を『現実』になる条件を果たすこと。果たせなければ君の負け。

……え？ ヒント？ 仕方ないなあ。じゃあ、一つだけ。君の世界に現れる住人達の、『名前』を知ること。

意味が分からないって？ そうだね、そうかも知れない。でも、それが君に起こる運命だから。避けることが出来ない、君自身が作り出した、運命。

ねえ、アリス？ ありがとう。

お礼を言われる意味が分からない、って？ ふふ、分からなくていいよ。俺達だけが知ってればいいから。

さて、これ以上、話をするのもどうかと思うし、アリス。そろそろ、ゲームを始めようか。

ゲームのスタートの合図は、『時計うさぎ』が知らせてくれるよ。

じゃあ、またね、アリス。また、君に会えるのを楽しみにしてるよ……

不思議な夢。でも、夢から覚めたら、それは変わらない毎日の始まり。少女 アリスは『不思議の国のアリス』の世界に憧れる、病弱な、極々普通の少女だった。

病弱であるが故に、部屋の中が彼女の世界の全てであった。だからこそ、尚更、部屋の外以外の場所に憧れを持つのだ。憧れが現実になることはない、彼女自身が良く分かっていたけれど。

「……………」

ゆっくりとアリスは目を開ける。目を開けた先に見えるのは、いつものように見慣れた部屋の天井である、はずだった。

「……っ!？」

思わず、驚いて声を出してしまいそうになるのを必死に抑える。視界の先に一番最初に見えたのは、ゆらゆらと揺れる白い、何か。よくよく見ればそれは、長いうさぎの耳、みたいだった。

何故、うさぎの耳が視界の中に入るんだろう？ アリスが最初に思い浮かんだ疑問だった。この部屋にはうさぎはおるか、うさぎの人形すらもない。必要最低限のものしか置いていないのだから当たり前と言えば当たり前なのだが。

もしかしたら、誰かがプレゼントとして置いていつてくれたのだろうか。と次に思い浮かんだことはすぐに消し去りながら、アリスは恐る恐る布団から手を出してそっと真っ白なうさぎの耳に触れてみる。

「わ、あ……」

触れてみた感触はとても柔らかかなもので、思わずアリスは言葉を漏らす。ふわふわとしていて、まるで綿菓子のように。アリスは癖になったのかふにふにと耳を触っていたのだが、触っていた耳がぴくり、と動く。

動いたことに驚いたアリスは慌てて耳から手を離しながらそっと耳から下の方へと目を向けてみるとそこには見た事のない男の子がいた。

うさぎの耳がついている以外は、とても綺麗な男の子。白銀の髪は雪のようであるし、端正な顔立ちもしている。だが、見た事もない人が部屋の中にいる、今の状況だけはどうしても理解出来ずに勇気を出して声を掛けようと口を開いた時だったろうか。

ゆっくりと、男の子の目が開く。ゆっくりと開かれていく瞳の色は、鮮やかな紅色。見た事もない髪と瞳の色に言葉を失うことしか

出来なかったアリスではあるものの、男の子の視線がゆらり、とこちらへと向いて思わず身体を硬くさせる。

「……アリス？」

「え？」

「『俺達』のアリスは、黒髪なのか……。金髪の方が映える気がするけど、まあ、いいか」

「？」

見知らぬ男の子から名前を呼ばれて、アリスはきよとん、とした表情になってしまう。そんなアリスにはお構いなしの様子でうさ耳の男の子は勝手に納得している。益々意味が分からなくなってきたアリスではあったが、男の子はゆっくりと立ち上がり、ぱんぱんと軽く服を叩いて埃を落とすとアリスへと向き直る。

「初めまして、アリス。俺は『時計うさぎ』」

「時計、うさぎ？ でも、あなた、時計を持ってません、よね……」

「？」

「……」

男の子 時計うさぎは、お辞儀をしながら名乗ったのだが、いきなり痛いところを突かれて思わず言葉を噤んでしまう。

ざっと見てみても、時計うさぎは懐中時計を持っているように見えなかった。時計うさぎと言えば首から下げているのだが、あるべきものが、そこにはなかった。

だからこそ、良く分からずにアリスは首を傾げることしか出来ない。それよりも、『時計うさぎ』というのはどういふ事なのだろうか、とも思う。

「……。その辺りは置いておいて」

「はあ……」

「俺はアンタを迎えにきた」

「迎え、に？」

「ああ、迎えに。本来なら昼に来るべきだったんだが、朝になっていた。まあ、気にしないでいいけど　とりあえず、俺は『役目』に沿って、アンタをアンタの望む世界へと案内する」

「望む世界……」

「そう、望む世界。……『不思議の国』への道案内役だ」

時計うさぎから告げられた言葉に、アリスはぱつと顔を上げる。そこにはどこか面倒そうな表情をした彼の顔が見えたが、今はそれを気にしている時ではなかった。

『不思議の国』。

間違いなく、そう言っていた。目の前にいるのも、あの物語に出て来る、『時計うさぎ』なのだろうか。そう思うだけで心が浮き立つのが分かる。

『不思議の国のアリス』。あの物語は、どんな物語よりも大好きだった。何度も何度も読み返して、その度に行けたらいいのに、と憧れを抱き続けていた。もちろん、行けるはずがないと思っていたのだけれど目の前の時計うさぎは、本物のようだった。

行けるのであれば、行きたい。自分に与えられた『世界』はあまりにも狭く、辛い場所だった。寂しくて、どうしようもない時が多くても我慢しなければいけない、『世界』。それを不幸とは思っていけない。三食食べることが出来て、部屋の中であればある程度は自由なのだから。

唯一、不幸だと思ってしまうのは、自分の身体。幼い頃から病弱だったので、思い通りに身体を動かすことが出来ない。それだけが嫌だった。

ここを出て、自分という存在が消えたのであれば、悲しんでくれる人はいるだろうか。少しは寂しいと思ってくれる人はいるだろうか。ほんのちよつとでも戻って来て欲しいと願ってくれる人は、いるだろうか。

そこまで考えてアリスは僅かに顔を俯かせながら、ぎゅつと自分の身体を抱き締める。その答えは誰よりも自分が知っているのだから。

何かを考えているようなアリスを見て小さく息を吐きはするも、アリスに向かってゆっくりと手を差し伸べる。

「何を考えてるかは分からないけど……、どうせ、くだらない事なんだろう？」

「……」。アリス、アンタ自身のことだ。行きたいか、行きたくないか、この二択だけだろ？」

少しだけ呆れた声で言われるとアリスは更に顔を俯かせてしまう。その様子を見て時計うさぎは僅かに困ったような表情になりはするも、このままで居ても仕方ないと思ったのが、選択肢を述べる。

行きたいか、行きたくないか。

どちらかを選ぶのであれば、もう既にアリスの中では決まっていた。決まっているけれど、その一步を踏み出す勇氣はなかった。それに気付いたのか、時計うさぎはわざとらしく溜息をつくと差しだしていた手をおもむろにアリスの腰へと回し、自分の方へと引き寄せる。

「えっ……!!？」

「言っただろ？俺は道案内役だ。選択肢を与えたには与えたけど、

アンタを連れていくことが俺の仕事だから、どう言われても連れていく」

「あ、あの……!」

密着している状態が恥ずかしくて堪らないのか、それとも時計うさぎの言葉に反論をしたいのか分からないがアリスは慌てたように言葉を紡ごうとするが、その前に、足元がいきなり無くなる感覚に陥る。

「……………!?!」

驚きで声を上げることも出来ず、目の前にある時計うさぎに必死にしがみつく。それに対して時計うさぎは小さく笑みを零す。

落下していく。どこまで落ちていくかは分からないぐらいに、空気の抵抗を受けながら早いスピードで落ちていく。

その感覚は今までに味わったことのないモノだったアリスは、途中で気を失ってしまったのだった。

「いらつしやい、アリス。君が望んだ『不思議の国』へ」
「……………」

誰かの声が聞こえてアリスは、ゆつくりと目を開けた。この行動をするのは二回目だが、身体の節々が妙に痛い。いつものふかふかのベッドの感触はなく、感じるのは硬く冷たい、床。

自分が一瞬どこにいるのか分からなくなってしまいが、はっと思い出したように辺りを見回す。ぐるっと一周見回したがあるのは小さな扉が一つと、その扉の前にテーブルがあるだけだ。

確か、自分は、落ちてきたはずだ。自分の部屋に突然穴が開いて、長い間落ちていたような感覚だけど途中で気を失ってしまったから、どれだけ落ちたかは分からない。

「時計、うさぎは…………？」

彼が自分をここに連れてきた。正確には、落としたはずだ。だけれど先程見た感じでは、時計うさぎの姿はなかった。

つまりは、置いて行かれた、ということだろうか。

自分は道案内役だと言っていたというのに、無責任過ぎないだろうか。アリスは少し怒ったように、頬を膨らませはするもとりあえずは立ち上がって、ぱんぱん、と服についただろ埃を払ったのだが、いつもの服とは違い、足元がやけに風通りが良いような気がし

て恐る恐る視線を下に向けると、そこにあつたのは可愛らしい、水色のフリルが沢山ついたドレスだった。

こんな服を着た事がなかったアリスは驚きで目を見開かせながらも、誰もいないというのに見えてしまっている足を隠すようにその場にしゃがみ込む。

確かに可愛い。この服は可愛いと思う。とても可愛い少女が着たら、それはそれは可愛いだろうと思う。だけれど、アリスはこの服が自分に似合うはずがないと思ってふるふるすると首を横に振る。

どうしよう、と考えた。

辺りを見回した際に、これ以外の服は見当たらなかったし、このままで居るしかないのは分かるけれどどうしても気持ちの整理が追いつかない。

困惑するしか出来なかったアリスは俯いたのだが、その時、不意に影が出来た。影が出来たということは何か我突然現れたか、誰かがやってきたか、なのだが。

何かが置かれたような音は聞こえなかったし、誰かが歩いているような足音も聞こえなかった。アリスは戸惑いながらも、ゆっくりと顔を上げるとそこにあつたのは、鮮やか朱色の髪と、どこか人懐っこいような、猫目をしている金色の、瞳。整った顔立ちをしている、男の子の姿だった。

「……………っ!？」

突然現れた、見たことのない男の子を見て驚きで息を呑みながら思わず後ろに後ずさる。その姿をばかん、とした表情で見ている男の子はくすり、と小さく笑みを零した。

よくよく見てみれば黒一色の動きやすそうな服を着ており、上の服はパーカーなのか、フードを被っている。そのフードの上を見て

みれば、頭の上の辺りに、三角のくぼみが出来ている。

「アリスでしょ？」

「……え？」

「へえ、いいね！ 黒髪もいい。アリスなら何でも良いけど。」

時計つさぎは？ いないから出てきたんだけどさ」

「目、覚めたときにはもう、いなくて……」

「ふーん……？」

目の前にいた男の子はアリスを見ると、嬉しそうに笑いながら名前を呼びつつ、うんうん、と頷く。だがその顔はすぐに僅かに顰めながら辺りを見回しつつ問い掛けると、困惑しながらアリスは素直に答える。

その答えを聞いた男の子は更に眉間に皺を寄せていたが、すぐにポケットの中から小瓶を出す。

中には何やら不思議な色をした液体が入っており、見た感じはドロドロしていそうな感じだ。それをアリスをじっと見ているのだが、男の子はくすり、と小さく笑みを零す。

「まあ、俺がこれを持ってってるのもおかしいと思ったんだよね。案内役はあいつのはずなのに……。いや、アリスと一緒にいられるってことだし」

「？」

男の子の紡ぐ言葉に不思議そうに首を傾げるアリス。そんなアリスを見ながら男の子は小瓶の蓋を開け、その中身を口の中に含む。それから手をそつとアリスの頬に触れつつ、顔を寄せていく。

何をされるのか分からなかったアリスは思わず目を閉じてしまうと、男の子は好機と思ったのかそのまま、自分の唇をアリスの唇に合わせ、口の中に含んだ液体を流し込む。

「んっ……!？」

目を閉じてしまったアリスだったが、突然のことに目を開き、離れようと男の子の身体を押し返そうとするが全く力が入らず、されるがままになり、口の中に流れ込んできた液体をついには飲み込んでしまう。

それを確認すると、男の子はゆっくりと唇を離し、ぺろり、と軽く唇を舌で舐める。初めての出来事にアリスは身体に全く力が入らずに、ぺたん、とその場に座り込んでしまう。

こんなことをしたのは初めてだった。知識としては一応はあるが、見たこともなければ経験したことなど一度もなかった。何をされたのかももう一度思い出してしまうと、アリスの顔は一瞬の内に真っ赤に染まる。

「おー、アリス。顔真っ赤」

「……っ……い、一体、何を……」

「何って……、そうだな。アイツが言うには、『ゲーム』に必要なものなんだってさ。あ、この小瓶はアリスが持ってた」

「げー、む……?」

「詳しい内容は俺は知らない。アリスは知ってるみたいだけど?」

男の子は一瞬の内に真っ赤になったアリスの顔を見て、茶化す訳でもなく、見たままを言うのアリスは隠すように俯きながら強く言い返すことも出来ず、か細い声で問うと男の子は特に隠すこともなく、あっさりと答えてくれる。

だが、その答えの中の単語をアリスは繰り返しながら、僅かに首を傾げる。

どこかで、聞いたことのあるような単語だ。もちろん、どこでも聞くことが出来るような単語だが、彼の言っている意味での『ゲー

ム』の意味を、確かに、聞いたことがあるような気が、した。

気がしたのだが、それを思い出すことが出来ずにアリスは悩んだ表情をしながら、こてん、と首を傾げてしまふ。その様子を見て、男の子はくすり、と小さく笑みを零して手を差し伸べる。

「アリス。俺は『チエシヤ猫』。案内役……って名乗りたいところだけど、まあ、護衛役って感じかな」

「チエシヤ、猫……？」

「そう。良く知ってるでしょ？」

「……時計うさぎに、チエシヤ猫……。まさ、か……？」

差し伸べられた手を反射的に取りながら、アリスは男の子　チエシヤ猫の自己紹介を聞いて、その名前を繰り返すように呼ぶと、チエシヤ猫は嬉しそうに微笑みながら、僅かに首を傾げて問い掛ける。

問い掛けられると、アリスは思い出すように名前をぼつり、と零す。ここに連れてきてくれたのは、時計うさぎだと名乗った。目の前にいる男の子はチエシヤ猫だと。それは自分が良く知る童話の中のお話に出て来る登場人物の名前だ。

アリスは、あり得ないだろう、という感じで言葉を漏らしながら。恐る恐るチエシヤ猫へと視線を向けると、まるで大正解、と言わんばかりの笑顔でゆつくりと言葉を紡ぐ。

「さすがは、アリスだね。大正解。……ここは、『不思議の国』だよ」

「！？」

当たり前のように告げられた言葉に、アリスは驚きで言葉を失ってしまう。もちろん、ここが彼の言う『不思議の国』だという証拠はどこにもない。

だけれど、出逢った時計うさぎは、本物だった。ただ、時計を持つてはいなかったけれど。目の前にいるチエシヤ猫も一見してみれば普通の男の子に見えるが、フードの下には、多分猫耳が隠れているのだろう。

そして何よりも見たことのない場所。着た覚えすらない服。信じられないのも無理はないが、信じる他はないのだと思うとアリスは、チエシヤ猫の手をぎゅっと握る。

「ん？ どうしたの？ アリス」

「夢、じゃないんです、か……？」

「……夢かも知れない。でも、現実になりえるかもしれない場所だよ、アリス」

「え？」

「アイツが言うには、そういう不安定な世界なんだってさ。夢のままで終わるかも知れないし、現実にも変わるかも知れない」

アリスの言葉を聞いたチエシヤ猫は、少しだけ困ったように微笑みながら自分の知っている範囲で答えをくれる。答えを聞いても全く実感は湧かなかったアリスは、ただ、言葉を失うことしか出来なかつたのだ。

そんなアリスを見ていたチエシヤ猫であったが、握られているのを良いことに、手を引っ張って座り込んでいるアリスを立ち上げさせる。

「きゃっ……！？」

「どうして座り込んでたの？」

「そ、それは……、その……服、が」

「服？ ……アリスに似合ってると思うけど」

「か、可愛い服は似合わないんです……私、には」

驚いた声を出したアリスを見ながら、チエシヤ猫は不思議そうに問い掛ける。問い掛けられるとアリスは素直に答えると、チエシヤ猫は更に不思議そうに首を傾げはするもキツパリと言いつ切る。

言い切られると少しだけ驚いた表情を浮かべるアリスであったが、ふるふると首を横に振りながら必死に否定をする。

そう、似合わないのだ、自分には。

誰よりも、自分が知っている。可愛いという単語とは無縁だということ。自分のことは、自分が誰よりも、知っている。ずっと、言われ続けて来たから、知っている。

アリスはぎゅっと握っていない手の方で服を握り締めながら顔を隠すように俯く。そんなアリスを見ていたチエシヤ猫はおもむろに握っていた手を離して、両手をアリスの腰に添える。

そのまま、軽々とアリスを抱き上げた。自分よりもアリスが高くなるように、腕を一杯に伸ばして。

「アリス。……『俺達』の方がアリスのことは知ってるよ」

「え……？」

「アリスは可愛いよ。誰よりも、何よりも、アリスより可愛い存在なんてない。……だから、アリス。笑おうよ？」

「チエシヤ猫……」

「暗い表情ばかりしてないで、ね？ 俺はアリスの笑顔がみたい。アリスの猫になりたい」

「猫って……チエシヤ猫は、猫だけど、男の子ですよ」

真剣な表情で告げられた言葉に、アリスは不思議そうにしながらも嘘は言っていないのだろうと思うと否定の言葉を飲み込む。

それにほっとした表情を浮かべながら、下から覗く形で僅かに首

を傾げてキツパリと言い切ると、アリスは、言い方が面白かったのか小さく笑みを零す。

小さな笑みだったのかも知れない。それでも今のチェシヤ猫には十分だったのだろう、満面の笑みを浮かべるとゆっくりと抱き上げていたアリスを下へと下ろす。

「うん。きっとここに居れば、アリスは笑顔になれる。だから、行こう?」

「……不思議の国……」

「そう、ここは『不思議の国』だよ。そして、俺はアリスの傍にいる。アリスを守るって約束するから」

行こう?と首を傾げながらも一度そう言い、ゆっくりとチェシヤ猫はアリスへと手を差し伸べる。少しでも躊躇ったアリスであったが、こくりと小さく頷くと差し伸べられた手を取る。

手を取られると嬉しそうな表情を浮かべながらゆっくりと歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3318y/>

夢境の国のアリス

2011年11月27日00時54分発行